

退魔一族紅 封魔巫女胡蝶編

……かつて西国では、鬼の一族が猛威を振るっている時代があった。鬼の首魁は名を「豪羅」といい、単眼鬼を初めとする狂暴で強大な鬼たちを率いて暴れまわり、人々を生きたまま引き裂き、それを喰らったという。豪羅は特に人間の子どもの脳みそを好んだとのことで、他の鬼たちに犯されながら泣き叫ぶ母親の目の前で、その子どもも頭蓋骨を剥がして中身を食ったそうだ。それはあまりにも酷い光景で、伝承には発狂した母親が喉を掻き毟って自死したという記述さえ残されている。

この豪羅と鬼の一族を倒すために、西国の大名たちは集団で兵を派遣して戦いを挑んだが、その結果は無残なものであった。三万の兵が派遣されたものの、生きて帰って来れた者はその半分にも満たなかったのである。残りは戦場で殺されるか、捕らえられて生きながら食われるという末路を辿った。

かくして鬼たちの勢いは衰えることを知らず、この国の全てを飲み込む勢いで快進撃を続けたが、その前に立ちはだかつたのが紅の一族であった。古来よりこの国に巢食うバケモノと戦ってきた紅の一族にとって、豪羅と鬼の一族の猛威は見過ごすことができない事態であった。

紅の一族と鬼の一族との決戦は七日七晩に渡って続き、紅の一族は多くの犠牲者を出しながらも鬼の一族のほとんどを滅し、さらには首魁である豪羅を封印することに成功したのだった。戦いから数十年後、力を取り戻した単眼鬼が豪羅の封印を解こうと攻めてきたことがあったが、その時は紅の一族でも特に優れた力を持つ「美しき武者巫女」の異名を持つ紅桔梗によって退けられている。かくして豪羅はいまもなお封じられたままだ。

豪羅はいまもなお、霊峰の麓にある隠れ里に封じられている。豪羅には「石化の封印」と呼ばれる封印が施されており、「一部」を除いた身体ほとんどが石によって覆われており、生きたまま石像としてその姿を晒しているのだった。そして年に一度、封印を強化すると同時に、豪羅の力を弱める儀式

がおこなわれているのだが、その儀式を数日後に控えたその日、隠れ里に「ソレ」がやってきた。

ソレは、紫色の肌をした人型だった。衣服を身に付けておらず、体毛も無ければ頭髪すらなく、目も、鼻も、口も、耳さえもない、人の形をした存在だった。異相だった。

ソレは少し前、星の落下と共にこの星にやってきた異星の生命体だった。猿に寄生して力を蓄え、そして「桔梗」という頑丈で優れた母体の中で形を成し、自らの目的を果たすために力を蓄えている最中であつた。

ソレの目的は進化と繁殖である。自分の分身をばら撒き、増やし、力を蓄えさせて、再度吸収することによって次の星へと「種」を送り出すことこそが、ソレの本能的使命であつた。

ゆえに、ソレは力を求めて、この地へと辿りついた。母体となつた桔梗という雌の記憶と知識の中に、この場所のことがあつたからだ。

「ク、クク、ククク……」

声では無い音を発して、ソレは隠れ里の外れに位置する社へとやって来た。そこは、石像と化した豪羅が据え置かれた場所であつた。

豪羅は巨大な鬼だ。見上げるような体躯を誇り、太い大きな角が生えた顔は巖のように恐ろしく、口には鋭い牙がズラリと生えている。腕は太く、足はもつと太い。全身が筋肉の鎧で覆われており、かつて棍棒のひと振りて百の兵を屠つたという伝説も残されている。まさに鬼たちの首魁として相応しい姿をしていた。

「クク、ククク……」

この鬼を見上げて、ソレは静かに笑つた。もし、この鬼が身動きが取れる状態であつたなら、支配することは簡単にできなかつたであろう。しかし、このように生きてままだ動けないことは、まことにありがたいことであつた。

なぜならば、ゆつくりと、時間をかけて内部から侵蝕していくことができるところである。そしてその間、抵抗はしたくてもできないのだ。

「ククククク……」

笑いながら、ソレは身体の一部を切り離した。

切り離された一部は、まるで蛭のように地面を這い、露出している生身の部位から豪羅の内部へと侵入していった。

「クク、ククククク……」

ソレはほくそ笑んだ。そして、目的を果たすと、その場からゆつくりと去って行ったのである。

石像の中で豪羅が悲鳴を上げた。叫んだ。しかし、石に覆われたその表面は、微動だにせずそのまま、内部を侵蝕されていることは、表に出ないのであった。

かくして、儀式の日を迎える。

続きは本編にて